

東アジアにおける仏教写本研究の 現況と研究方法

落合 俊典 (国際仏教学大学院大学教授)

1. 仏教写本の定義

仏教写本は、言語によって、また地域によってその形態と文字が異なる。ここでいう東アジアにおける仏教写本とは、サンスクリット語などのインド系諸語やチベット語によって伝えられた仏教写本のことではなく、東アジア仏教世界で用いられてきた漢語による仏教写本である。書写された写経も含めて、ここでは仏教写本という。

写本に用いられているものは紙を中心に帛、木(木簡)、竹(竹簡)、石、瓦、金属等種々の記録媒体がある。

仏教文献の総体はどの地域にあっても膨大な分量に達していたが、現存する地域や種類は限定されている。中国では10世紀に本格的な版本の時代

に入り、それまで写本で伝えられてきた文献は急速に消滅し、今世紀初頭まで唐代の文献で伝世していたのは僅かに『説文解字』木部残巻と『唐韻』だけであった。日本では17世紀に印刷文化が到来したことで、伝統文化遺産を尊重し伝承してきたこともあり、極めて多くの写本を有している。もちろん、19世紀の廃仏毀釈、幾たびかの戦乱や戦火、度重なる地震・洪水等により甚大な被害を蒙ってきたために消失した写本は天文学的分量に達したが、それらの被害を免れた写本は、東アジア地域の中では相対的に多いことも事実である。

2. 東アジア仏教写本研究の現況

敦煌写本研究 … 敦煌写本研究の現況については既に先学の優れた案内書¹⁾があり、ここで述べる必要もないが、それらの書物に書かれていないことを一点述べたいと思う。

写本研究において最も肝要なことは実物を直接手にとって調べることであるが、周知のように敦煌本の多くは、大英図書館、フランス国立図書館、中国国家図書館、ロシア科学アカデミー東洋写本研究所などに所蔵されていて、一般研究者の閲覧を厳しく制限している。これは文化財として当然の処置であるが、ではどうしたら敦煌写本を閲覧できるのであろうか²⁾。

1) 神田喜一郎『敦煌学五十年』(神田喜一郎全集第9巻、1984年)、季羨林主編『敦煌学大辞典』(上海辞書出版社、1998年)、池田温『敦煌文書の世界』(名著刊行会、2003年)等。欧米の研究概況についてはIDP(INTERNATIONAL DUNHUANG PROJECT)のサイトを参照。

<http://idp.bl.uk/>

2) W. アーヴィング (Washington Irving 1783~1859) は言う、「とにかく学問の聖域というものは、管理が厳重で、知識欲に渴く学徒は、知識の泉を前にしながら、なかなかそこに近づけずに焦れたい思いをするのが常だ。』(『アルハンブラ物語』上。140頁。岩波文庫)

図書館では図書司書が責任を負っているが、博物館では学芸員 (Museum Curator) が担当しているのである。大英図書館にある敦煌写本は元来大英博物館に属していた。貴重な文化財という位置づけもあり、学芸員が出納をしている。フランス国立図書館の東洋写本部は貴重書の山である。その結果、専門学芸員が大きな権限を有している。ロシアは所定の手続きを経れば意外に簡単に閲覧できるが、入国ビザの取得と科学アカデミーの門をくぐるまでに大きな書類の山を片付けなければならない。中国国家図書館は書類審査が済んだあとに待ち構えているのは特別貴重書閲覧料の請求である。

このほかに敦煌本を所蔵している機関は沢山あるが、概ね所有する点数は10数点から100点内外である。中で最も多いのが、武田科学財団杏雨書屋の敦煌秘笈であろう。世界の敦煌写本を有するプライベートコレクションでは最大であり、約700点ある。この写本を閲覧するのは至難の業で、現在の日本の代表的な敦煌学者は誰も見ていない。

このように敦煌写本研究にとって必須の実物閲覧は困難を極めるが、何としてもこの関門を通過しなければならない。そのためにしなければならないことがある。まずは、学芸員に認められる専門家になることである。敦煌写本に関する研究論文を草し、予め学芸員に送り、認知してもらうことが重要である。次に、貴重書を管理する学芸員を悩ます研究者の文化財に対する無知を取り除く努力をすることである。写本には、写本を扱う一定のルールが存している。活字本や版本を扱っていた者が、急に卷子本を渡されても戸惑うだけである。大英図書館のスタイン本の大半はこの巻物であるが、大英図書館が詭説した細長い箱に元通り戻すのは容易でない。卷子本は開くのは意外にも簡単であるが、巻き戻す作業は冷や汗の連続となる。日頃から卷子本の扱いに馴れていることが要求される所以である。

日本における仏教写本研究 … 日本では比較的仏教写本³⁾が多く現存しているが、江戸時代以前の仏教写本は限られていて、閲覧したりすることは容易ではない。仏教写本を写経とそれ以外の章疏集伝記や聖教などの写本とに分けてみよう。

【写経】

正倉院聖語藏⁴⁾：隋唐写経、奈良写経、平安写経等4,960巻

その他各機関：奈良写経約1,000巻

法隆寺：平安写経の法隆寺一切経927巻⁵⁾

：大谷大学博物館蔵法隆寺一切経約90巻⁶⁾

石山寺：石山寺一切経4,644帖⁷⁾

高野山金剛峯寺：平安写経の中尊寺一切経4,296巻⁸⁾

：平安写経の荒川経(美福門院経) 3,568巻

中尊寺：中尊寺金字一切経2,739巻(内15巻紺紙金銀字交書経)

-
- 3) ここで言う古写本とは江戸時代(1603~1867)以前の写本を指す。南北朝・室町時代(1336~1573)や鎌倉時代(1185~1333)の写本は決して多いとは言えないが、それでも平安時代(794~1185)の写本の数量と比較すると大と小である。これが奈良時代(710~794)の写本ともなると極めて稀であり、手にとって見る機会は皆無に近い。
- 4) 宮内庁正倉院事務所編集『聖語藏経巻』第Ⅰ期(隋唐経篇243巻)・第Ⅱ期(天平十二年御願経750巻)・第Ⅲ期(神護景雲二年御願経742巻)丸善(株)。
- 5) 『法隆寺の至宝 昭和資料帳』7(写経・版経・版木)、小学館。1997年。
- 6) 『法隆寺一切経の基礎的研究—大谷大学蔵本を中心として—』(科研・研究代表者竺沙雅章、1996年度-1998年度)。
- 7) 石山寺文化財総合調査団編『石山寺の研究 一切経篇』(法蔵館、1978年)。文化庁「国指定文化財等データベース」指定番号1612 石山寺一切経
- 8) 『金剛峯寺蔵中尊寺経を中心とした中尊寺経に関する総合的研究』(科研・研究代表者上山春平、1988年度-1989年度)。『中尊寺金銀字経に関する総合的研究』(科研・研究代表者藤澤令夫、1994年度)。『中尊寺経を中心とした平安時代の装飾経に関する総合的研究』(科研・研究代表者湯山賢一、下坂守、興膳宏、2001年度)。

- 金剛寺：平安鎌倉写経の金剛寺一切経約4,500巻⁹⁾
 七寺：平安写経の七寺一切経4,954巻¹⁰⁾
 興聖寺：平安鎌倉写経の興聖寺一切経約6,000巻¹¹⁾
 妙蓮寺蔵松尾社一切経：平安写経の松尾社一切経約3,000巻¹²⁾
 名取新宮寺一切経：平安鎌倉写経の新宮寺一切経2,979巻¹³⁾
 西方寺：平安鎌倉写経の西方寺一切経2,532巻¹⁴⁾
 大門寺：平安鎌倉写経の大門寺一切経97巻
 徳運寺：平安写経から室町写経の徳運寺一切経約130点¹⁵⁾

【写本】(章疏集伝記、聖教等)

- 高山寺典籍文書類 9,293点¹⁶⁾
 青蓮院吉水蔵聖教 1,622点¹⁷⁾
 金沢文庫 数万点
 真福寺文庫 約15,000点¹⁸⁾
 叡山文庫 約11万点(近世写本を含む)
 東寺観智院聖教類 約15,402件(近世写本を含む)¹⁹⁾

- 9) 『金剛寺一切経の総合的研究と金剛寺聖教の基礎的研究』第一分冊・第二分冊(平成15年度～18年度科学研究費補助金基盤研究(A)：課題番号15202002。研究代表者落合俊典)
- 10) 『尾張史料七寺一切経目録』七寺一切経保存会。昭和43年(1968)。
- 11) 京都府教育委員会『興聖寺一切経調査報告書』1998年。
- 12) 中尾堯編『京都妙蓮寺蔵『松尾社一切経』調査報告書』大塚巧藝社。1997年。
- 13) 東北歴史資料館『名取新宮寺一切経調査報告書』1980年。
- 14) 大和郡山市教育委員会編『大和郡山市西方寺所蔵一切経調査報告書』1984年。
- 15) 『徳運寺の古写経—愛知県新城市徳運寺古写経調査報告書—』国際仏教学大学院大学学術フロンティア実行委員会。2009年。
- 16) 文化庁「国指定文化財等データベース」指定番号2386 高山寺典籍文書類。
- 17) 文化庁「国指定文化財等データベース」指定番号2454 青蓮院吉水蔵聖教類(千六百二十二種)。
- 18) 『真福寺文庫撮影目録』上下(智山伝法院編集、真言宗智山派宗務庁刊、1998年)

仁和寺聖教 未詳

金剛寺聖教 約15,000点²⁰⁾

醍醐寺聖教類 16,441点 (江戸時代写本版本を含む)²¹⁾

随心院聖教 約12,000点 (現在調査整理中)

石山寺校倉聖教 1,926点²²⁾

輪王寺聖教 未詳

三千院円融藏典籍文書類 3,021点 (江戸時代写本版本を含む)²³⁾

妙法院門跡聖教 未詳 (現在整理中)

智積院聖教 未詳 (現在整理中)

東大寺図書館 約12,700点 (東大寺文書は除く)

高野山大学図書館 寄託本に仏教写本が多い

宮内庁書陵部 一部貴重な仏教写本がある

静嘉堂文庫 典籍は20万点。貴重なものがあるが仏教写本は少ない

龍門文庫 約百点 (289点の内)

東京大学史料編纂所 貴重な仏教写本もある

東洋文庫 和書は多いが仏教写本は限定される

大東急記念文庫 2万点 (仏教以外及版本を含む)

身延文庫 日蓮関係の写本が中心

慶応大学斯道文庫 所蔵図書は14万冊 (仏教写本も含む)

六地藏寺法宝藏 もと根来寺にあった写本・典籍

19) 文化庁「国指定文化財等データベース」指定番号2422 東寺観智院聖教類

20) 赤塚祐道・佐藤もな共編「金剛寺聖教目録稿」(前掲注9所収)。赤塚祐道編「続金剛寺聖教目録稿」(『真言密教寺院に伝わる典籍の学際的調査・研究—金剛寺本を中心に—』科学研究費補助金基盤研究(B)。研究成果中間報告書。平成20年度。研究代表者後藤昭雄)所収。

21) 文化庁「国指定文化財等データベース」指定番号2515 醍醐寺聖教類

22) 文化庁「国指定文化財等データベース」指定番号2480 石山寺校倉聖教

23) 文化庁「国指定文化財等データベース」指定番号2437 三千院円融藏典籍文書類

博物館（京都国立博物館、奈良国立博物館、東京国立博物館等）

美術館（逸翁美術館、大和文華館、根津美術館、三井記念美術館等）

その他

上記した所蔵寺院や機関は、既に調査が進展しているものばかりであるが、興味深いことに、これらの写経や写本の調査研究をした人たちの専門分野は、ほとんどが日本史学と国語学の研究者ということである。仏教学を専門とする人は数少ない。この傾向は、資料調査にあたって自ずと偏向がもたらされることになったと推測される。さらに仏教学を専門とする人が調査員に加わっても、その専門は日本仏教の人にはほぼ限られてきた。

しかし、よくよく考えて見るならば、平安写経や鎌倉写経と言っても漢語で書写された中国仏教の所産になる資料である。中国仏教のテキスト論に関心がなければ、卷子本の山の概観を眺めるだけに終わってしまう危険は免れがたい。

仏教写本の調査現況についても同様な感想を抱くのである。目前に新羅仏教の転写本があってもその価値判断がつかないし、中国南北朝期に著述された教学思想書が書写されていても書名が欠損し、撰者号も見えない場合、取り上げて調べるまで至らない。

かくして或るコレクションの調査が完了し、目録化がなされて、報告書が刊行された後でも発見がありうるということになる。具体的な例を次に挙げよう。

七寺一切経の調査は昭和41年に終了し、報告書が昭和43年出版された。その後、10年、20年と経過したが、誰からもこのコレクションのなかに中国で既に失われた貴重な文献が眠っているとの指摘がなかった。筆者は、平成2年（1990）4月9日、この奇妙な事実直面することになったが、俄かに信

じることができずに、自分の考えが間違っているのではないかと何度も覚醒するよう言い聞かせたほどである。

七寺一切経の中に眠っていた『毘羅三昧経』上下二巻は、釈道安の『綜理衆経目録』に依れば漢訳經典の影響下、最初期に編集撰述された疑経26部30巻のなかに記録されている書物である。成立時期はおよそ3世紀から4世紀である。それが12世紀に日本で書写された七寺一切経のなかに在ろうとは誰も信じられないであろう。七寺一切経を調査し現存目録を作成した研究者は、文化財保護委員会²⁴⁾の人たちである。この書に一言すら言及が無く、かつその後の研究論文にも全く述べられていないことを考え併せると、若き筆者の勘違いではないかと疑うのも或いは当然だったのではないだろうか。

筆者は、集中的に調べ上げて恩師の牧田諦亮先生に報告した。牧田先生は中国仏教の専門家であるとともに、疑経についても大著を書かれていてまさにこの新出写経の研究に最適な世界的碩学であった。このことが幸いして牧田諦亮先生の監修の下、研究叢書全6巻が刊行されることになった²⁵⁾。

この研究叢書の刊行が終わろうとした頃、京都大学人文科学研究所の梶浦晋氏からお電話を頂いた。それは大阪府河内長野市の金剛寺一切経のなかに、既に失われた安世高訳『十二門経』が現存している、については鑑定してくれないかという話であった。梶浦氏は中国近世史の研究と仏教版本の研究を主としているので經典の内容については専門でないという。筆者も安世高訳經典を研究しているわけではないのでお断りしようかと思ったのだが、判断基準となる一つの事実を知っていたので後日検証することに

24) 文化財保護委員会の近藤喜博主任文化財調査官と後日歓談する機会が得られた。その際に氏が言われたことは「私たちの調査は文化財を保護するために目録を作成することにあります。その目録に基づいて貴重な研究をして頂き感謝します」と述べられた。

25) 牧田諦亮監、落合俊典編『七寺古逸經典研究叢書』全6巻。大東出版社。1994年~2000年。『毘羅三昧経』は第1巻に所収されている。

した。

安世高訳『十二門経』は、初期中国仏教で重要視された経典であったが、その理由は『太子瑞心本起経』などの仏伝経典類に釈尊の悟りは、十二門の禪定(四禪、四無量心、四無色定)の後に得られたとあったことから、信徒や学僧の関心が高かったのである。そのために郗超(336~377)は『奉法要』のなかで本書を引用し仏教の要諦を示している。これが僧祐撰『弘明集』の中に収録されていたことから、この引用文と一致すれば確定できると考えたのである。ただ、隋の仁寿二年(602)に成った『仁寿録』には欠本とあることから『十二門経』の日本伝来はあり得ないと想定したのであるが、結果は紛れもない『十二門経』そのものであった²⁶⁾。

この結果を重く受け止め、筆者は金剛寺一切経の調査に参加することになったが、文部省(現文部科学省)からの助成金も得て本格的に体制を整えることにした。その成果は報告書²⁷⁾に詳しいが、ここで思わぬ展開をみることになった。

その端緒は七寺一切経の研究の過程で遭遇した、高麗版や宋版などの刊本一切経のテキストとしての問題点指摘から始まる。七寺一切経中の鳩摩羅什訳『馬鳴菩薩伝』は、全ての刊本一切経本と異なる内容を有していたが、詳しく調べると日本に現存する古写経の『馬鳴菩薩伝』は皆七寺本と同一であることが分かり、また玄奘撰『一切経音義』、慧琳撰『一切経音義』、『法苑珠林』などに引用されている『馬鳴菩薩伝』はどれも七寺本等の日本古写経本系統であることが明瞭になった。このことから日本古写経のテキストとしての価値が俄にクローズアップしてきたわけである。

現存する日本古写経の総量は数万巻と膨大であるが、実のところ今まで

26) 『金剛寺一切経の基礎的研究と新出仏典の研究』(平成12年度~平成15年度科学研究費補助金基盤研究(A)(1)研究成果報告書。課題番号12301001。研究代表者落合俊典)。平成16年3月。

27) 前掲注9参照。

誰も一切経の系統論、系譜論的視点を以て日本古写経を研究した人がいないのではないか。そのように考え、その実証的な研究を試みてみようとしたのである。そこで大学から特別の助成金を出してもらって、なおかつ文部科学省からの補助金も得て研究を推進することにした。

文部科学省 私立大学学術研究高度化推進事業

学術フロンティア「奈良平安古写経研究拠点の形成」²⁸⁾

この事業は平成17年度から平成21年度までの5カ年間で、今年3月末で終了する。

その成果として、日本古写経のデータベースの基礎ができた。国際仏教学大学院大学のホームページを開くと「日本古写経データベース」²⁹⁾が出てくる。ここに日本古写経の画像の一部が閲覧できる。そして大学図書館内の古写経画像閲覧専用パソコンでは全巻画像の閲覧が自由になっている。

これまでの研究において筆者は多くの研究成果を提示してきたが、筆者にとっても予想外の事が多かった。例えば、海南師範大学の林敏研究員は日本に留学中に『大仏頂首楞嚴経』の研究をしたが、日本古写経本はこれまで知られてきた刊本一切経本の系統と大幅に異なり、詳細な研究の結果、日本古写経本が初治本であり、刊本一切経本が再治本であることを証明したのである。このことは一例に過ぎないが、日本古写経の基本的性格を現わしているのである。

では日本古写経は系譜論的にはどのように位置づけられるであろうか。膨大な分量の古写経の藍本研究を積み重ね、帰納法的に集成しなければ正

28) 学術フロンティア「奈良平安古写経研究拠点の形成」ニュースレター「いとくら」第1号～第5号参照。

29) <http://koshakyo-database.icabs.ac.jp> 参照。

確な結論は出ないが、大凡の見通しを立てるならば、書写された平安鎌倉写経は殆どが奈良写経の転写本と想定される。奈良写経は、隋唐の長安仏教(中原仏教)のテキストを反映した古写経であり、敦煌写経と親近性を有するテキスト群と称せられる。この一群は開宝蔵(北宋勅版)や高麗版が刊行される以前の写本一切経であり、文献学的に極めて重要な資料群と言えるのである。従来の文献学的研究はこの視点を欠き、主に刊本中心の校訂を行ってきた。敦煌の写本の出現で若干この傾向は是正されては来たが、如何せん敦煌写本には揃いの一切経など存在せず、刊本一切経との校勘は十分に行き渡らないままであった。しかし、日本に現存する奈良写経の転写本と想定される平安鎌倉写経の現存総数は厩大であり、それらを用いた文献学的研究を強力に推進する時代に入ったと確信するのである。

これらの日本古写経の研究はまさに始まったばかりであるが、時まさに高麗初雕本が千数百巻ほど確認されて高麗大蔵経研究所のデータベースも本格的に開始されことになった。加えて中国からは世界に残存している開宝蔵十二巻を影印し、卷子本に復元して上梓するという。大いに期待がもたれる学問的慶事である。

3. 仏教写本の研究方法序論

先ず一般的な思想研究に対しては先行論文の調査から始めることが多いが、仏教写本の実践的な研究方法も一定の準備が必要である。むしろこの準備に調査成功の可否がかかっていると云っても過言でない。

今日はパソコンの普及とデータベースの充実化で非常にやり易くなったが、少し前には想像できない苦勞があった。実例を示そう。

真福寺調査 (調査責任者の阿部泰郎名古屋大学教授から調査許可)

- ① 準備・研究 … 目録の入手。黑板勝美編『真福寺善本目録』(正・続)をコピーし、『真福寺文庫撮影目録』上下(智山伝法院編集、真言宗智山派宗務庁刊、1998年)を2セット購入(1セット=18,000円)。黑板目録に掲載されていない書目を中心にして徹底的に調べ尽くし要点検書目に付箋を貼り準備完了。
- ② 調査・本番 … 『仏書解説大辞典』(縮刷版³⁰⁾)持参。ノートパソコン(Mac)。メジャー。東方年表。ルーペ。薄様。『大正蔵』55巻。大正蔵目録。カメラセット。
目標とする箱を決め、その中の写本は全て点検する。疑問に思った写本は研究用写真として撮影。調査カードに概要を記入。
- ③ 後処理・研究 … 研究用写真をもとに『大正蔵』等の活字本と比較検討。翻刻作業。
関連論文の探索。研究会で当該写本を輪読。

研究成果：寛印撰と推定される日本最古の浄土教目録『**阿弥陀仏経論並章疏目録**』の発見

拙稿『『律宗章疏』・『開元録随要抄』(擬題)・『阿弥陀仏経論並章疏目録』解題』(『真福寺善本叢刊』第二期「真福寺古目録集二」臨川書店、2005年)

研究成果：玄奘講説・普光筆録と想定される『**大毘婆沙論文義次第**』の復元

30) 『仏書解説大辞典』は全11巻であったが、携帯に便ならしめるために筆者の提案で縮刷版ができた。

拙稿 『『大毘婆沙論』の訳出と綱要書の編集—『文義次第』復元への試み—』『国際仏教学大学院大学研究紀要』第10号。2006年3月)

研究成果：齊志法師撰『**厭世論**』の発見 … 平安時代日本の学僧が著述した禅研究書

拙稿 『『厭世論』と達磨藏 (『松ヶ丘文庫研究年報』20号、2006年)

拙稿 「平安時代の禅籍—真福寺藏延久五年写『厭世論』—」(『印度学仏教学研究』55巻第2号、2007年)

研究成果：唐代刑部郎中封無待撰『**般若心経注**』の発見

拙稿 Feng Siye, Palace Censor Dispatched to Western Turkestan, and Feng Wudai, Bureau Director in the Ministry of Justice and Buddhist Exegete: A Buddhist Commentary by Feng Wudai Preserved in Japan

(2009年6月カザフスタン会議発表)

以上のように仏教写本の実際的調査と研究がおこなわれ、成果が出てくるのである。およそ調査に予見は禁物である。なぜなら、自分自身の研究上の関心から、求める写本や典籍が絞られているが、これが災いして別の新しい写本が目の前に置かれていても気がつかないことが多いからである。

4. 個別研究の実例—新出・伝新羅僧玄超撰『最勝太子別檀供養儀軌』—

筆者は今回の金剛大学校仏教文化研究所の要請で日本における仏教写本研究の現況の報告を求められ、以上の概要をまとめた。最後に韓国仏教に関連する写本を一点紹介しよう。新羅僧玄超撰との伝承がある極めて珍しい写本で、書写年代は長承二年(1133)である。この写本は枳形粘葉装と言われるもので、空海(774~835)が唐から将来した『三十帖冊子』に遡源がある。

金剛寺聖教19-125『最勝太子別檀供養儀軌』一卷 【後出の資料を参照】

本書は、奥書に非常に重要な記録が残っている。

奥書「或人云保壽寺玄超製之」

この奥書の意味は、「或る人が、保壽寺の玄超が本書を著したと言っている」である。玄超とはどのような人物であろうか。幾つかの資料に依れば、新羅の僧侶であるという。

日本の『密教大辞典』には「善無畏三蔵の付法。伝歴詳かならず。保壽寺に住し、大曆二年(767)胎藏大教・蘇悉地大瑜伽及び諸尊瑜伽等の法を青龍寺恵果に伝ふ。(大日経伝法 次第記、恵果行状)」と書いてある。恵果行状、すなわち『大唐青龍寺三朝供奉大德行状』には、

(恵果) 季二十二。又於無畏三蔵和上弟子玄超和上邊。求授大悲胎藏毘盧遮

那大瑜伽大教。及蘇悉地大瑜伽法。及諸尊瑜伽等法。一一親垂旨授。

(『大正藏』50卷。295頁上段)

とあり、恵果が22歳の時、善無畏三蔵の付法の弟子玄超和上から大悲胎蔵毘盧遮那大瑜伽大教と蘇悉地の大瑜伽法および諸尊瑜伽等法を親しく授かったという。

そして善無畏三蔵訳の『大毘盧遮那経廣大儀軌』巻下には、

此法從摩訶毘盧遮那。付屬金剛手。金剛手次傳。付屬那爛陀寺達磨鞠多阿闍梨。達磨鞠多阿闍梨。次付屬中天竺國王種釋迦善無畏三蔵。善無畏三蔵開元中來至此國。當玄宗朝為大國師傳法灌頂。次付屬海東新羅國僧玄超阿闍梨。玄超阿闍梨次傳。付屬京青龍寺僧慧果阿闍梨。慧果阿闍梨次傳。付屬僧法潤阿闍梨。大和八年甲寅歲三月七日。付屬慧日寺五部持念僧惟謹。

(『大正藏』18卷108頁中段)

と出ている。善無畏三蔵が付法した弟子玄超は、「海東新羅國僧玄超阿闍梨」と称せられていたのである。玄超の著述は従来全く知られていなかったが、ここに一本登場することになった。もとより、この奥書の伝承がどこまで事実を反映しているのか不明であり、新羅僧玄超の著述とするまでの行程は難渋を極めるであろうが、この日本の古写本を頭から疑う必要はない。何故ならば、玄超が付法した弟子恵果は、日本から入唐した空海の、その師に相当する阿闍梨であるからである。真言密教の伝承の緊密性を想定するならば、この写本の研究を進める価値があるだろう。

5. 人文古典学の基本・写本研究を志す韓国の若き研究者へ

今回の金剛大学校仏教文化研究所のセミナーでは、日本の四人の研究者が発表する予定である。その中の一人は、山梨県の身延文庫に襲蔵されていた古写本の中から新羅僧義寂の著述を発見した報告を行なう。三巻本の一巻、しかも前欠の断簡ではあるが、本書が日本の学僧の書棚から消えて八百年後の今、その姿を現した文化的意義は大きい。

東アジア仏教思想に多大な影響を与えた新羅僧義寂には多くの著述があったと言われているが、現存するものは僅々二部という惨状であった。ここに新出本が加わった。新羅仏教の理解は、本書を徹底的に研究することによって一段と深まるであろう。

次にもう一人の発表は、韓国仏教で最も著名な元暁に関することである。敦煌写本の中から元暁の著述『起心論疏』の一部が見つかったというのである。日本の研究者にとっても驚きの発見であるが、韓国の人たちにとってはまさに驚天動地に違いない。まず、大英図書館の未整理の敦煌写本の中に眠っていた断簡1点を発見し、その後世界各地に所蔵されている敦煌本を博搜した結果、ロシアと中国からも断簡が見つかったという。これは元暁の偉大さを物語る具体的な物証になるものと考えられる。元暁の思想が中国仏教に直接影響を与えたことは紛れもないこととなった。恐らく、この発見は韓国の仏教文化に誇りを抱く人々に大きな感動を与えるに違いない。

* * *

このように敦煌や日本で新羅仏教の著述が次々に発見されているのは、何も単なる偶然ではなく、歴史的必然である。

日本仏教は高句麗に始まり、百濟仏教や新羅仏教との交流が盛んであっ

た。次いで遣唐使を通じて直接中原仏教の摂取に努めている。このことから、中国、朝鮮半島、日本という縦の関係で交流が一方的に行われてきたように思われがちであるが、新羅元暁の書が敦煌へ伝播しているように相互交流の場でもあったのである。

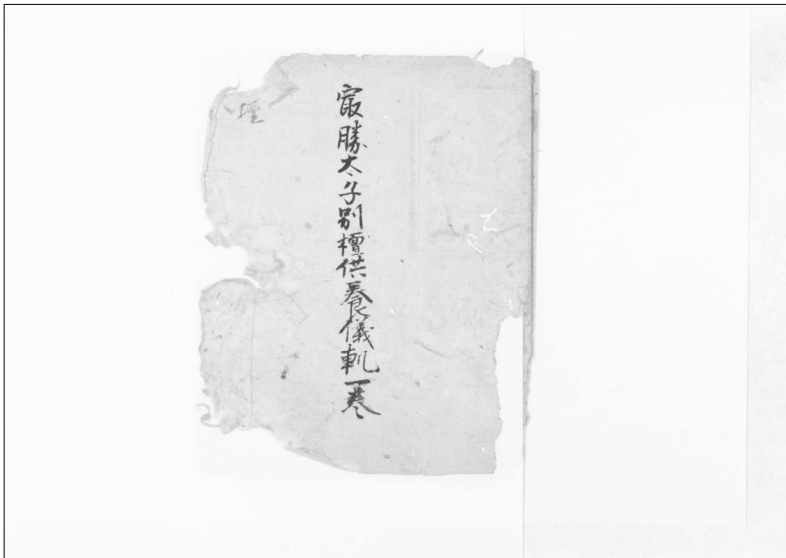
このように連携する東アジア仏教の世界について、写本を通じて研究を進める人文古典学の復興を目指すよう期待する。もとより東アジア仏教研究のためには、日本の古刹や文庫等の諸機関を訪問することを心がけるとともに、欧米にある敦煌写本を直接閲覧し、研究されることも重要な課題である。韓国の若い研究者の研鑽を大いに期待したい。(了)

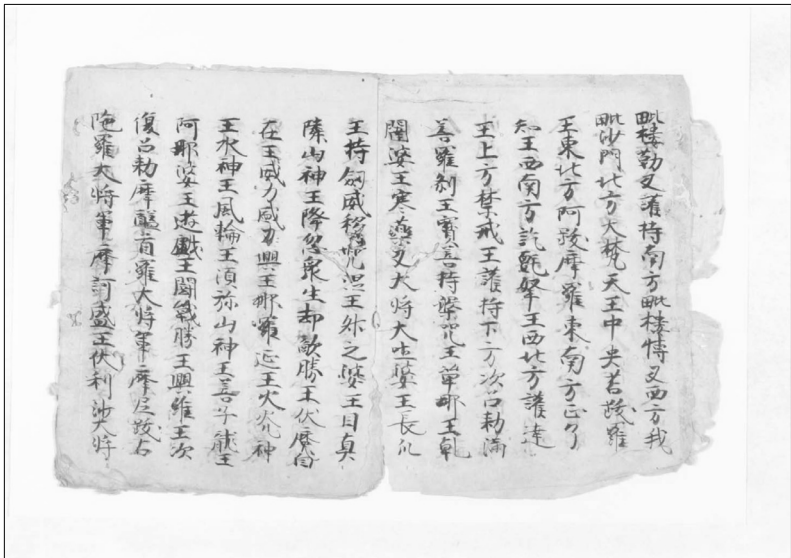
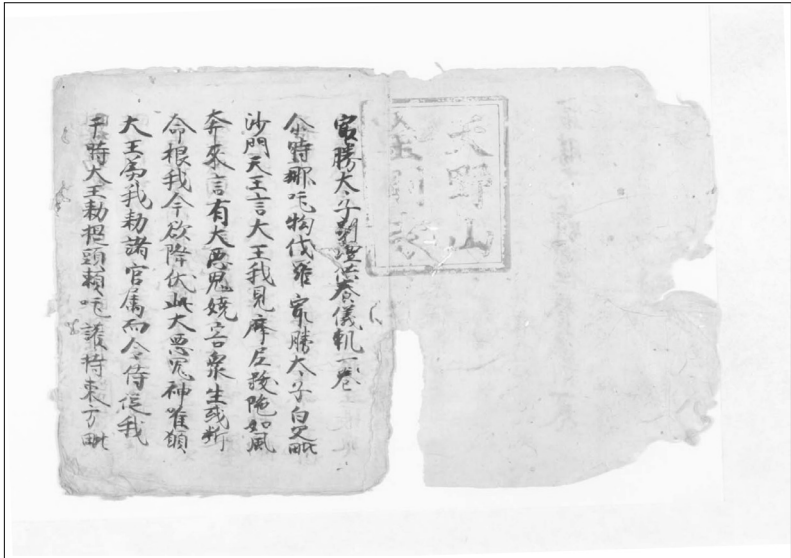
キーワード

仏教写本、敦煌写本、日本古写経、聖教、新羅僧玄超、『最勝太子別檀供養儀軌』、金剛寺一切経、七寺一切経

金剛寺聖教 19-125 最勝王太子別檀供養儀軌

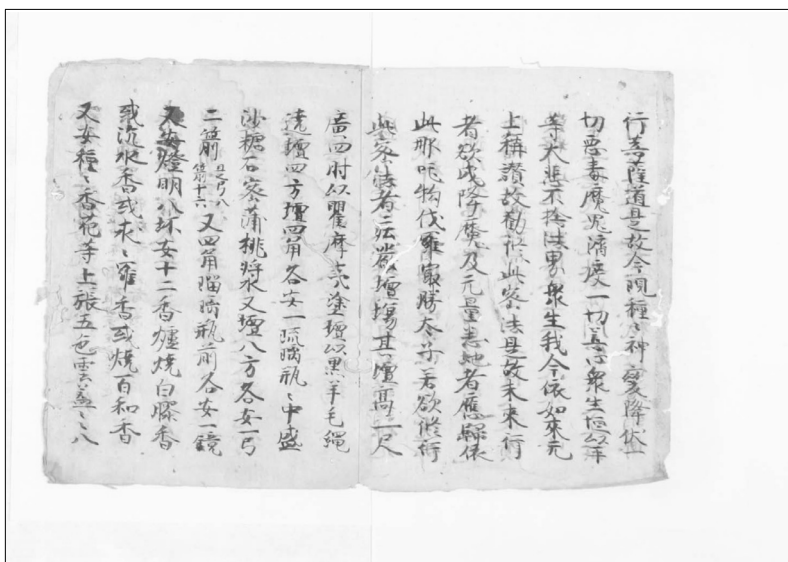
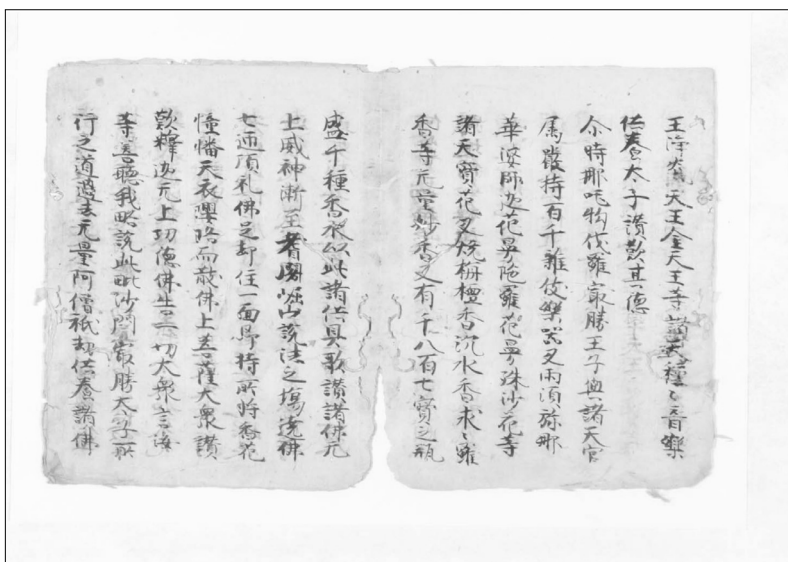
最勝太子
別檀供養儀軌

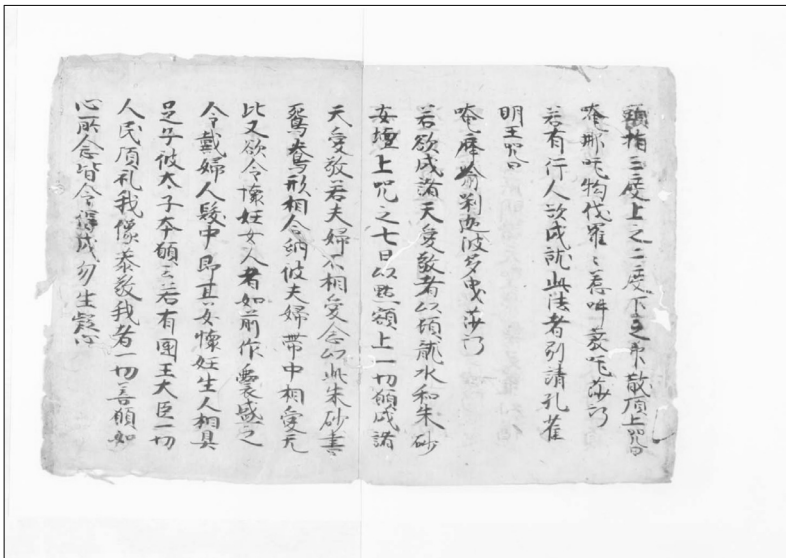
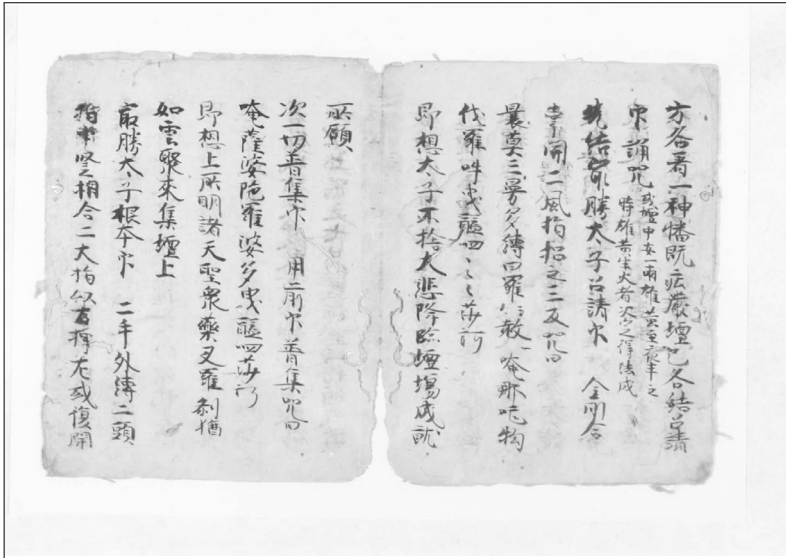


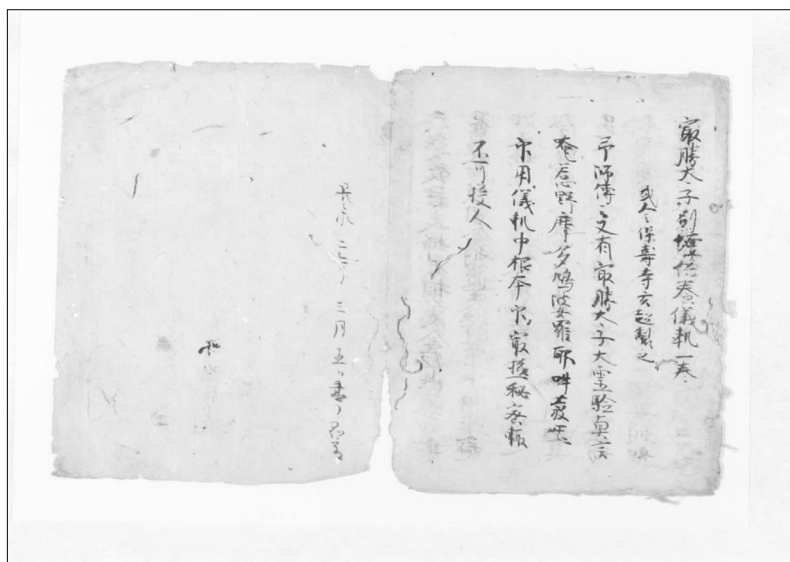


軍毗摩佛沙大將軍結持咒王讚咒
 藏王時來集此處忽房那吒物伐羅
 王亦侍從官屬今時那吒太子領諸天
 神王二十八部藥叉大將軍三十三部諸
 羅刹衆共守諸衆前後圍遶讚歎太
 子威德神變無比之相此時那吒物伐
 羅太子昂然成天身其身色黑赤著
 妙天衣垂寶璣臨觀四面具八臂中面
 端心如善薩貌其色白肉左方之面開
 口出牙眼圓怒相其色青黑右方之面
 如自在天微笑之相其色赤白具受樂
 德頂上一面如藥叉以慈暴惡相耳絕黃
 色其口大開牙齒長利面之之髮紺青
 之色髮中有九白龍上出解經云馳版

徑亦龍腰徑青龍復原戴日月信其七
 日輪各放光明猶如常光交雜亂散云手
 作合掌次二手各執刀聖持次二手各執
 跋折羅次手執三叉鉞觀此大身已座乳
 震烈大地搖動日月精光黑雲俄起藥
 虛空界一切江河皆沸浪崩淋猶如熱火
 一切諸山威怒摧碎空同塵埃世共知
 何處一切神靈走避失方一切諸魔闍維
 舞地備如獲活仰視太子自言若我執
 奪鬼神知死不久何得免離此惡毒身
 此時太子任慈悲心以天甘露令服令
 之皆得發息元有慧松秉力安樂身
 心自在今時林天王毗摩大王天林天
 王梵輔天王化樂天王切德天王大神天







Abstract

Buddhist Manuscript Research in East Asia: the Present Situation and Research Methods

OCHIAI Toshinori

Professor, International College for Postgraduate Buddhist Studies

It goes without saying that the main language of Buddhist manuscripts in East Asia was Classical Chinese. From the foundation of Chinese Buddhism until around the fifteenth or sixteenth centuries both intellectuals and scholar monks were using it as a common mutual language.

Long had the transmission and copying of Buddhist texts been done with handwritten manuscripts, but in the tenth century in China the *Kaibaozang* 開寶藏 (*Beisong chiban* 北宋勅版 or Northern Song imperial edition) had published a printed edition of the Tripitaka and the printing of sūtras became popular. However, even following this there was no abandonment of handwritten manuscripts and they continued to be used for daily use, but throughout East Asia as print publishing culture developed

the primary use of handwritten manuscripts declined.

Today any person seeking to conduct research on East Asian Buddhist culture must consider and well understand the present situation of manuscript research. Here I will, with young Korean researchers with an interest in manuscript research in mind, outline the following five articles and explain their significance: 1) The definition of Buddhist manuscripts. 2) The present situation of Buddhist manuscript research in East Asia. 3) An introduction to Buddhist manuscript research methods. 4) A particular example of research *Choesung taeja byoltan gongyang uigwe* 最勝太子別檀供養儀軌 by the Silla monk Hyongcho 玄超. 5) The basis of classical studies in the humanities.

Key Words: Buddhist manuscripts, Dunhuang manuscripts, Japanese handwritten sutras, religion, Silla monk Hyongcho, *Choesung taeja byoltan gongyang uigwe*, Nanatsudera canon, Kongoji canon

2010년 5월 13일 투고
2010년 6월 7일 심사완료